



令和2年度 8月人権一口講座



人権一口講座

「信じついでに」

あるお母さんが講演会でこんな話をされました。
「初めて大勢の前で話します。息子が高校生の時の話。当時、息子は下宿から高校に通っておりました。担任の先生はいつも私に『あの子はいい子だ。お母さん、心配はいりません。信用してやって下さい。大丈夫ですから』とおっしゃっていました。」

ある時、学校から「今日が期末試験の日なのに息子さんが学校に来ていない！」と私に電話があり、「そんなはずはない。弁当も下宿に届けたし…。いったい何が起こったのか!」と、私は頭の中が真っ白になりました。「そんな愚かな息子だったのか?」と連絡を受けた後、下宿先に向かいました。息子は居ませんでした。私が下宿の前に立っているとはどことなく先生が坂道を自転車を押しながら登ってこられました。先生は「お母さん、たぶんあの子は市の図書館がどこかで勉強しているのだと思います。そうであれば友達と受験の準備をしているに違いない。大丈夫です。信じてやってください」そう二人で話をしている所に息子が自転車を押して現れました。その時、先生が大声で息子の名前を呼ばれ、息子は驚き青い顔をしていました。すると先生は、息子に向かって「大丈夫か!」と聞かれました。息子は即座に『はい』と返事をしました。すると、『そうか?』とだけ先生はおっしゃり学校に戻って行かれました。「どこに行つてたのだ!」とか、叱るような言葉もなくただ『大丈夫か』そして『そうか』とだけ。後は息子に全てを任せられました。あの人生の一瞬で、私は『息子は救われた!』と思つています。」

私は、この話を知り、自身の中学生時代を思い出したのです。入学試験も終わったので、親に内緒で学校を休もうと思いました。実家が農家だったので、親が畑に出かけ家に誰も居なくなるまで、押入れに隠れていました。しかし、その日に限って母はなかなか家を出ません。それどころか押入れのある部屋に入り何か探し物をしているようで、押入れだけは開けることもなく、部屋に入つては出てを繰り返ししていました。

そのうちお昼時になり、学校の終業時間近くになったので自ら押入れを出ました。結局、お昼ごはん抜ききの押入れ一日待機でした。けれど、その日の母親の行動が変わったので、その晩何かを言われると思つていましたが、何も言われず、翌日も一週間後も何も言われませんでした。今思えば、学校から連絡があり、ダメ息子を探していたら押入れに気配を感じたのでしょうか。しかし、母は持久戦を選んだのだと思うのです。今のこのコロナ禍での自宅待機の様子で思い出してしまったのです。この体験の後、病気以外では私は学校を休むことはありませんでした。

最後に、母が亡くなる前に話す機会がありました。「覚えてないかも知れないけど、学校に行かず押入れに隠れていたこと知ってたん?。」
母は「あくバレバレしたい。」と言いい、微笑んでいました。

〔熊本市ふれあい文化センター広報紙「かけはし」令和2年度8月号より〕

短いメッセージ

おにいちゃん ちょっとやさしくないけど
めちやくちゃ だいすき

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会 人権カレンダー 白川小学校1年 桑本旭さん(令和元年度の作品より)